

地 形 研 究

No. 3

実 験 地 形 学 研 究 会

1989 年 4 月

目 次

	頁
温故知新・十年大昔・・・・・・・・・・吉永秀一郎	1
空理空論・・・・・・・・・・責任転嫁	5
＜ニュース＞	
KGRG（近畿地形研究グループ）	
による各大学の物品調査・・・・・・・・石井孝行	9
＜研究室紹介＞	
筑波大学地球科学系土質試験室・・・・・・・・水野恵司	11
＜おわりに＞・・・・・・・・・・武田一郎・辻本英和	13

温故知新・十年大昔

吉永秀一郎（森林総合研究所）

1. ことの起こり

1988年春の日本地理学会が終わって、下高井戸の飲み屋に、30名を越す寒冷地形談話会の面々が押しかけたときのことである。酔いもいい加減にまわってくると、あちこちでさまざまな議論の輪ができた。特にこのときの飲み会には、普段、月例の発表会にはここ数年も出てきていないような大先生や、地方の大学に就職していて、学会の時にしか参加できないような人も多数参加しており、若手の研究者（院生やODなど）を相手に怪気炎をあげていた。

その議論の中で、某都立大のN先生が「最近の地形学はおもしろくないよ。だいたい卒論や修論の成果を学会で発表したものなんて、ここ10年くらい似たようなもの多くて、しいて違ふとすれば地名が変わっているくらいじゃない。ためしにここ数年の予稿集の地形に関する部分を切り取って、バラバラにしてごらん。だれも年代順に並べなおすことなんてできないよ。」という、実に耳の痛い、そして実に的確な指摘をした。

さて、N先生が勤めている大学は、毎年一人か二人は地形学で卒論をかく卒業生を出しており、また地形学を専攻する大学院生もいる所だから、このN先生の指摘は、考え方によっては、実に無責任な言動である。しかしそれはさておいて、確かに近頃ハッ!!と驚き、これはまいった!!と思うような論文が少ないのも事実だと思う。

2. 地形学と生態学とは

ところで現在私が所属している森林総合研究所は、名前のとおり、森林を研究する研究所である（なお蛇足ながら、森林総合研究所は昔は林業試験場といていたが、1988年10月に組織再編が行われ、名称が変更した）。森林を取り扱う学問で、私たち地形屋にとって耳慣れた、そして親しみを感じることできる学問として、生態学がある。生態学には、大きく分けて、一つ一つの種の生活史と種が構成する個体群の変動を取り扱う個体群生態学と、そのような個体群を多種まとめて一つのシステムとして捉え、そのシステムに対する入・出力ならびにシステム内のわかり得る物質の変化過程を扱う生態系生態学の二つの流派があるということである。同じ生態学を研究する人のなかでも、「種という問題を扱わない学問は生態学ではない」という意見をもっている人もいれば、「一つ一つの種だけ見ていたのでは全体がつかめないの、とりあえず生態系という現実にある概念をもって自然を理解しよう」という意見をもつ人もいるらしい。生態学の分野では、昔は「生態学とはこうあるべきだ」というような議論がよくされたらしいが、近頃では、あ

まりされないらしい。とはいえ、生態学では「生理がわからなければ、生態は理解できない」なんて考え方はあまりしない。むしろ生態学はそれ独自の体系をもっており、それを生態学独自の手法として誇っているところもあるように感じる。そのような意味で生理学に対して、一線を画している。一方で生態学の基礎の一つになる、どちらかといえば定性的とでもいえる植物社会学だってまだその果たす任務は残っているという。つまり、物事には各レベルにはそれぞれに特有の法則があり、確固とした自主性をもった体系があることが尊重されている。

さて地形学に帰って考えてみれば、このような生態学における二つの流派の存在と、その流派ごとの考え方の違いは、アナロジーの適否はともかくとして、地形学における「発達史・変動屋さん」と「営力屋さん」の存在と似ているような気がして、共感を覚えてしまう。まあ植物の世界は、長いといわれている森林でも、いいところ数千年、普通の植物ならば数年の時間単位で考えられるので、現象をよりダイナミックに捉えることができやすい。この点は地形学とは少し異なる。しかし近頃の地形学が生態学と違うところは、「地形学の最終目的は」とか「地形の基礎方程式」とか「地形変化の定量化」といった議論が、比較的よくなされているところではないだろうか。ということは今までの地形学は、あまりにも記載的で、定性的であったということになる。ないしは局地的な地形発達史のみしか扱っていなかったということであろうか。実際にそうだったかも知れない。でも、それも一つの地形学であるという開き直りも、当然あってしかるべきであろう。大体、よく研究されているといわれている段丘地形の発達史だって、少しずつ資料が積み重ねられて、ここ数年間の間にやっといろいろなものが見えてきた程度なのだから。

物理的な次元で測定された物理量によって、地形ならびに地形変化を定量的に表現することは、普遍性を獲得するための方法ではある。しかしそうした普遍性は、一面において地形のもつ「地形的なもの」、とくに「歴史的なもの」に対しては、不十分であることも多いのではないのだろうかという疑問をその一方で感じてしまうのは、私だけではないと思う。

3. だって僕たちは地理学教室の出身だもの！

ところで、私が大学の学部と大学院で受けた講義の大半は、地形発達史や変動地形や気候変化といった、どちらかといえば、第四紀学といってもよいような内容のものが多かった。これに対して地形を構成する物質の物理的・化学的性質、さらには風化に伴う物性の変化に関するような講義は聴いたことがない。大体、そのようなことを講義できるだけの人が、地理学教室にはほとんどいない。本などで得た知識から、仮にそのようなことに興味をもったとしても、どのように研究したらよいのかを誰に聞けばよいのかさえ判ら

ないことが多い。加えて、地理学教室には電顕はもちろんのことX線回折、蛍光X線、一面せん断、三軸圧縮などの機器がない。原子吸光ないしは分光光度計ですら、もっていない。となれば、そんな大学にいる学生が、論文をかくとすればとにかく足で稼ぐか、またはひたすら地形図や空中写真とにらめっこをし、計測をして、時には数学の助けを借りてデータを得るしか方法がない。このような状況は、地理学関係では、なんぼ理学部に属しているという教室でも、筑波大を除くと、似たようなものではないだろうか。そして地形学を専攻する大学院の院生が、「地形は歴史的産物であり、地史を明らかにする過程を通じて地形の形成・発達の法則性を追求する」という考えをもってしまい、物理性についての考慮が足りないと行く末を案じられても仕方がないのではないだろうか。

4. シンポジウムは楽し

さて、「発達史・変動屋」が何も知らずに某地形学連合の研究発表会にいくと、どこか場違いの所にきてしまったのではないかという気が起こることもある。加えて一部に声の大きな人がいるので、その声の大きさにあっけにとられてしまう。とはいえ、そこには実にいろいろな分野の人が集まっていて、その人達を見ているだけでもとても面白いので、懇親会での酒のはずみも手伝って、恐いもの見たさについつい深入りしてしまうこともある。そして、そのうちにその手の議論にマヒしてしまい、そう簡単には驚かなくなる。かといって理解できたかどうか、という問題は別の話である。しかし私みたいな浅学な人間では、所詮、地形を構成する物質の物理的・化学的性質や風化に伴う物性の変化に基づいた地形変化の話にはついていけないことが多く、めげてしまう。

こんなふうをめげたときには、シンポジウムが一番である。といってもシンポジウムに参加して、講演を聴くことではなく、シンポジウムの総合討論の議事録を読むことである。別にシンポジウムでなくても、地形研究の2号に載ったような討論会などの記録でもよい。とにかくほかの人たち、特に大家の先生や、オピニオン・リーダー的な中堅の研究者の、勝手気ままというか、あまり構えていない議論を読むに限る。このような議事録を読んでいると、まず、いま何が問題なのかを理解するのに役立つ。それに加えて新しい、他の人の考え方やアイデアを理解することができ、時によっては拝借？することも可能である。しかし一番の効用は、普段の学会やシンポジウムなどで大声でまくしたてるように(?)議論をする某中央大のS先生・某大阪市大のH先生や、ひとたびガソリンが入ったら誰も止めることのできないほどエンジン全開になって議論を吹きかける某地理院のHさんなどの、その場にいたら圧倒され呆然として聴きのがしてしまうような発言が、ゆっくりと考えながら理解することができることである。

さらに古いシンポジウムの議事録を読んでも、大昔に、シンポジウムで指摘されて問題となっていたことの多くが、実は今日でも同じように問題になっているということがわかる。うまくすると、昔には問題とされていたが、その後は余り議論されなくなってしまったようなことでも、いま改めて考えると解決が可能なことが見つかる、ないしは見つけるための手がかりが得られるようになった、ということが結構ありそうだとすることもわかる。また声の大きい大先生方のいっている内容が、大昔とそんなに変わっていないということもわかる。まあ、多分に落穂拾い的是ではあるが、総合討論の議事録には私たちが今後、研究しなければならないテーマが一杯ばらまかれているともいえよう。

ためしに雑誌「地形研究」2号に載った実験地形談話会の討論会の議事録を見てみると、そこには地形変化に及ぼす気候変化の影響、地形変化の場および時間の問題、ブラックボックス論、経験式の問題などが議論されており、これが10年前の記事だろうかと思うほど今日的である。さらに雑誌「地形」1号や2号に載っている議事録を見ても、同じような感想を抱くと思う。さらに最近のシンポジウムの総合討論に参加したり、その議事録を読むと、感想が確信に変わる。実際には十年の月日を経ているので、地形学における問題点のほんの一部については、研究が進んだために認識が深まってはいることもあるが、問題の根底にある部分是一緒であって、未解決の問題が山積みされていることに気が付く。

こんなことを考えていると、なにもN先生がいったように地形学のテーマに目新しいこと、画期的な進歩がないという指摘があっても、それは昔からそうだったのだということがわかり、安心する。大体、そんな私たちを指導し、牽引してゆく人たちだって、私たちが解決しようと考えている問題に対して、必ずしも明確な、正しい答えを出してはいないということがわかって、もっと安心する。そしてまだやることはたくさんあるのだという「ヤル気」がきっと湧いてくるだろう。

そんなわけで地形を研究するにあたっては、長老達の見解もさることながら、それを横目でみながら自分自身が面白いと思ったことをするに限る。私自身は岩石物性に関する理解もなく、営力を測定することもなく、数学的モデルを立てることもないままに、単に時系列的に地形がどのように変化してきたかという自然が実験してくれた結果を解析（解読）によって、自然を理解しようとするのが一番楽しくて、地形を研究している。いわば探偵の面白さみたいなものだとい人悦に入っている。ただし何が正しくて何が問題であるかを常に考える洞察力、これは研究したらものになるかならないかを早めに見極める目、そして急ぎ足の議論はしないという信念の三つだけはもっていたいと思う（がままならない）。

空理空論

責任転嫁（某大学）

先生の中には、そのまた先生の批判が趣味、という方がいらっしゃる。また、時によっては、先生方の次のような言葉を耳にすることもある。

若い人達は我々の研究を批判しなければ駄目だ。我々を批判し、乗り越えろ。

ところが、我々にとっては、批判などとはとんでもないことであり、先生方の研究を理解するのに四苦八苦しなければならないというのが現状である。そんなうちに、若い連中には元気がないと逆に評されてしまうのである。しかし諸君、あまり気にしない方がよい。以下で、あまり気にしない方がよいという理由について述べる。

まず、誰が唱えたかは解らない、次の第一の空理がある。

余り優秀でない研究者は自分を批判せよなどとは言わない。
もし言ったとしたならば、その研究者はマゾである。（第一空理）

第一空理より、「自分を批判せよ」などと言うのは優秀な研究者である。また、優秀な研究者であれば自分の研究が優れたものであることを認識していなければならない。さらに、研究と言うものは、ある事象・現象に対する一種の攻撃行動であるから、研究者は優秀であるほど強い攻撃的性格を有する。すなわち、次の第二の空理が得られる。

優秀な研究者は自分の研究に自信を持つために、批判されると、猛然と反撃する。もし反撃しなかったならば、その研究者は、マゾである。（第二空理）

妥当でない批判に対してはもちろんのこと、当を得た批判に対しても、研究者という者は黙ってはいられないのである。また、第二空理から、「自分を批判せよ」と言う言葉は単なる自己満足の表明にほかならないということが容易に推測される。すなわち、「自分を批判せよ」という言葉は、「俺の研究の批判などはできないだろう」という意味、あるいは「批判などしたら必ずや返り討ちにしておやるぞ」という意味であり、けっして批判を切望しているわけではないのである。すなわち、必然的に、次の第三空理を導くことができる。

「自分を批判せよ」との言葉に対しては軽々しく対応してはいけない。もし軽々しく対応するような若者がいたとしたならば、その若者はマゾである。 (第三空理)

そもそも、優れた研究とは普遍的なものであり、優秀な研究者とは、優れた研究をする人のことをさすから、優秀な研究者の研究は普遍的であり、したがって、優秀な研究者の業績を批判するということは、その批判が普遍的でないということを意味する。

以上の空論を要約すると、次のようになる。優秀な研究とは、そもそも、批判のできないものをさすから、それを批判するのは間違いであり、また、優秀でない研究は批判する必要がない。すなわち「自分の研究を批判せよ」という大先生の言葉は無意味である。

まあ、それはそれとして、確かに我々には覇気がない。批判精神に欠けている。自分の意見を表明しようとする意志がない。この地形研究には、おそらく、我々の世代からの意見はあまり集まらないであろうと思われる。次にその理由について考える。

優秀な研究者は、自分の弟子がまだ未熟であるにも係わらず、あるいは未熟であるが故に、弟子に対し、本能である批判欲・攻撃欲を抑えることができない。弟子は優秀な師のあまりにも適切な批判を必然的に予測するあまり、冒険ができず、師の言うことを鵜呑みにするようになる。その結果、批判力は育まれない。

一方、その優秀な研究者に師事した弟子は、絶え間のない批判・攻撃に耐えて育つために、比較的我慢強い性格を有するようになる。また、師の顔色を常に伺って過ごすので、他人の考え・気持ちを察する能力がつく。同時に優れた研究の進め方を教わるから、ある程度の研究はできるようになる(練習問題を解くようなものではあるが)。この弟子のさらに次の世代は、我慢強く、穏やかで、他人の気持ちをおもんばかり、ある程度研究方法(まだ未熟でもついて行ける程度)を身につけた者に接することになる。この世代の者は、ちょっとしたミスくらいでは批判されることがないために、そのうちに、どんどん好き勝手なことをやるようになり、すでに過去のものとなった研究方法に固執する師を反面教師として育つことになる。批判力おおせいで、思ったことをすぐに実行に移し、攻撃的な性格をもつようになる。すなわち、有能な研究者になる可能性が大きい。以上のことから次の空理を導くことができる。

優秀な研究者は、その能力のために優秀な研究者を育てるこ

とができない。優秀な研究者は一世代毎に育つ。

(第四空理)

このパターンは学会レベルにも当てはまる。現在の地形学会においては、研究者タイプは、ある程度年を召した先生方に多いと思われる。第四空理より、次の若い世代には、研究者タイプは少なくなる。すなわち我々の世代は、強い批判欲は持たず、自己主張は公の場では控えることとなる(批判は陰でやる)。「特に自分が投稿しなくなつて・・・」である。なお、第四空理は、日本についてのみ当てはまることで、USA・UK・GRDなど、ノーベル賞学者を多く有するような国々にはあてはまらない。研究者の養成システムが異なるからである。

もっとも次のような意見もある。現在、第一級の頭脳の多くは企業に進む。公的研究期間に在籍・在学する我々の世代の平均的な頭脳は第一線級ではない。研究者としてのレベルは当然のことながら落ちる。この公的研究期間に在籍する我々の世代にとっては、地形研究に関心を持つ余裕などはない。また、企業に進み、優秀な頭脳を有する人々には、地形研究に関心を持つ暇がない。

さらに、次のような意見もある。三十代前半は三無主義のはしり、二十代後半はその全盛、二十代の前半になれば五無主義(現在の大学生は七無主義とも九無主義とも十一無主義とも言われている)であるから、このような世代にとって、地形研究のように業績に無関係なものに対しては、無関心となる。

以上のような諸空論より、我々の世代が地形研究に意見を出す可能性は、残念ながらきわめて低いと予想する。しかし、それでは、また先生方に元気がないと言われそうなので、ちょっとした感想を述べることにする。

地形学連合の大会に参加して常感することであるが、討論の時間が非常に足りない。と言うよりも、まったくない場合も少なくない。司会者の「時間がありませんので、あとは個人的に・・・」との言葉を聞くたびに、またか、と残念に思う。その責任はプログラムを組む執行部にあるのではなく、ほとんどすべて発表者にある。時間を守らない発表者が余りにも多い。長ければ長いなりに、短ければそれなりに、その発表時間を使用しなければならない。意見・質問・討論を希望するならば当然その時間を残して発表を終えなければならない。地形学連合の大会で発表時間をオーバーするのはどういう人々であろうか。若い人には少ない。慣れていないということもあろうが、何度も練習したり、時間配分を計算したり、内容をメモしてから発表に臨むからである。ところが、以外にも学会をリードしなければならない(現にリードしている)先生方に時間オーバーが目だつのである。中には、明らかに、

壇上に立ってから発表内容を考えておられる方もいらっしゃる。確かに、立て板に水のごとく、先生方は話がうまい。しかし、早口による難しい言い回しは、発表会には不向きである。また、数式の羅列も発表会には馴染まない。スライドやOHPも、練られていないものが少なくない。それどころか、ほとんど見えないものまである。参加者に理解してもらわなければ、なんのための発表であろうか。日本の研究者は口頭発表が下手で、発表時間にルーズであるという評価を聞いたこともある。口頭発表の能力も、研究者としての重要な条件の一つである。

と、偉そうなことを言ってしまったが、今度発表するときに怖い。それに、こういう私も若い世代の一人であり、上述の若い世代に関する全ての特質を備えているので、この拙文に対する批判も怖い。失礼ながら名前を伏せさせて戴く。なお、善し悪しは別として、若い世代がこのような特質を持つようになったのは、この世代だけに原因があるのではない。若い世代の特質は、彼らの師や先輩の影響下で形成されるのである。前述の内容と矛盾するかも知れないが（空理空論だから矛盾しても構わない）、ある世代の特質は地形と同じで、それ以前の全ての世代の履歴を反映すると考えられる。とにかく若い世代の皆さん、もっと自信が持てるようにがんばろうではありませんか。

< ニュース >

KGRG（近畿地形研究グループ）による各大学の物品調査

石井孝行（大阪教育大）

KGRGでは、会員相互の研究・調査の協力体制を強化するための一環として、1987年各大学・研究機関にどのような機器があるかの調査を行った。その結果は以下に示す表のとおりである。利用の申し込み・問い合わせは、直接各大学・研究機関に行ってください。

表 KGRGによる各大学機器具調べ（1987・12・5）

大学名	研究室名	機器具名	備考
神戸大学	田中研究室	DP-1（図化機） 簡易解析図化機G3 万能顕微鏡（ニコン） 位相差偏光顕微鏡2台 （ニコン） Wild ST4 RdEオートレジャー オートマチック ポイントカウンター 高屈折域アツベ屈折計 以上30万円以上の物品	すべて空いている 時使用可
鳥取大学	豊島研究室	電気探査機（L10型） 放射能測定機 音響測深機 図化機	
京都学園大学	井上研究室	光波測距儀	
大阪教育大学	石井研究室	遠心分離機 双眼実態顕微鏡3台 鉱物顕微鏡 自記記録計2ペン1台 1ペン3台 野外観測用データコレクタ	すべて空いている 時使用可 3電源 1台3電源 2台AC

大阪教育大	石井研究室	ロータリーシャッター ビデオカメラ他ビデオ関係 Phメーター パナコピー 転倒マス型雨量計2台 水位計 電子天秤(1mgまで) 小型一面せん断試験機 小型旋盤	AC電源 移動不可
京都大学	地形・土壌 部門	測量機 (含・光波測距儀) 水質分析設備 粒度分析設備 画像解析設備 野外水文調査機器 野外調査機器 自記記録計	測量機器の取扱い に習熟している こと 科学分析の教育を 受けていること * 全ての物品につ いて：大学の備品 のため貸出は不可。 利用目的や計画を 教えてもらえれば 共同研究として利 用を検討
大阪工業大学	藤田研究室	弾性波探査機器一式 電気探査機器一式 偏光顕微鏡(ニコン) 簡易図化機G3 岩石薄片用研磨装置一式 * 走査型電子顕微鏡一式 * 簡易画像処理装置	空いている時はお おむね利用可だが、 機器によって(特 に野外調査機器) 共同研究を原則と しているものがある * : 共同研究でな いと無理
東京都立大学	野上研究室	パソコン・ミニコン用周 辺機器 A0判デジタイザー 小型スキャナー カメラ A2判XYプロッター など	空いている時は利 用可(学外持ち出 しは不可)

＜研究室紹介＞

筑波大学地球科学系土質試験室

水野恵司（筑波大・地球科学系）

筑波大学で地形を扱う研究者は、1ヵ所にまとまっているわけではなく、地球科学、環境科学、水理実験センターの3つの場所で主に仕事を行なっている。研究者は、場所が固定しているわけではなく、テーマ、実験施設に応じて仕事を移動する。地球科学では砂村を中心に海岸地形、松倉・水野を中心に風化、マスマーブメント、松本を中心に熱帯地域の地形、松岡を中心に周氷河地形が研究されている。環境科学では、安仁屋を中心に氷河地形、リモートセンシングが研究されている。水理実験センターでは、池田・伊勢屋を中心に河川地形が研究されている。このように、研究テーマと場所が分散することから、すべてを私が紹介することは無理と思われるので、私が主に研究場所としている地球科学系土質試験室に限って紹介することにする。

ここ土質試験室では、主に風化、マスマーブメントを中心に研究が行なわれている。これまで、この部屋で実験が行なわれた主な研究は、およその時代順に次のようである。1.泥岩の乾湿風化、2.ローム人工崖斜面の後退過程、3.シラス台地の谷壁斜面の発達、4.花崗岩斜面の形成過程、5.花崗岩・ハンレイ岩の風化過程、6.地すべり地の斜面形成過程、7.地すべり運動のメカニズム、8.浅間山山麓の田切地形の発達過程などがあり、最近では、9.粒状体の安息角決定のメカニズム、10.岩石表面の蜂の巣状構造などを研究対象としている。

場所は筑波大学の物理、化学、地球科学の研究室が集る自然学系B棟の1階にあり、9x8mの小部屋である。建物と部屋は1976年には完成していたが、その看板に相応しくなったのは1979年からで、この年に圧密試験機、一軸、三軸圧縮試験機、一面せん断試験機、土の物理的性質を調べる諸測定器など一通りの室内土質試験用機器が備えられた。さらに約3年のうちに貫入試験機、弾性波測定装置、土壌硬度計、検土杖、シュミットロックハンマーなどのフィールド測定器具が揃った。その後は、パソコン、ビデオそして院生の恩田君自作のアルミ丸棒安息角測定装置が増えた程度で、備品はほとんど変化していないが、むしろソファベッド（現・大教大、辻本講師、当時院生寄贈）、テーブル、冷蔵庫、なべ、釜などの厚生施設が充実してきた。この厚生施設の充実、武田技官（現・京教大助教授）の存在が大きかったと思われる。

現在の部屋の半分は実験室、4分の1はリビングルーム、残りは研究室となっている。使用頻度が高いのがリビングルームで、ここ5年ほどは毎昼食後、お茶を飲みながらの歓談の場となり、また季節ごとのパーティの場所となっている。学問的なディスカッションの場所と言いたいところだが、バカ話の方が多いようだ。研究室としては、これまで前門氏（現・琉大助教授）以来、技官が数年づつ使用し、部屋の管理を行なっている。他にこの部屋で実験を行なう大学院生、学部生が在室してきた。さらに、アルバイトの美人女性が週2回来る。

土質試験関係の機器はそろそろ他の工学系の研究室に比較すると時代遅れとなり、設備の更新が必要となっている。しかし一つの大学であまり不平をいってもしかたがない。基礎的なデータは得られるし、教育用としては十分である。こみいった試験が必要な場合は他の最新の研究機関で借用しようと考えている。特に自慢できる機器があるわけではないが、他の研究機関の方の施設利用は歓迎します。東京駅からバスを乗継いで1時間半、ぜひ一度遊びにおいでください。

<おわりに>

武田一郎（京都教育大）

辻本英和（大阪教育大）

昨年（1988年）4月の地理学会の時の話である。「コーヒーでも飲むか」と思って外に出たのが間違いの始まりであった。コーヒーをすすりながら、「今晚どこで酒を飲もうか」などと、久々の単身、かつ異郷の夜の予定を相談していたところ、中央大の鈴木先生が店に入ってこられた。となりの席に座られると、“隆”を“竜”と改められた方がよいと思われるほどに、赤炎を吐き散らし、周囲を焦がし回っておられた。その途中、どういう経緯だったかは忘れてしまったが、われわれに、「“地形研究”を復活させろ。原稿は若い奴に書かせろ」と命じられた。「ワープロでタッタッタと打ったやつを、サッサッサとコピーして、ホチキスでパンパンパンととめ、ヒョイと表紙をつければ出来上りだー。金は心配するな」といとも簡単そうにおっしゃる。「なんか簡単そう」と思っているうちにいつのまにか引き受けてしまっていた。

昨年10月、秋のJGU大会（仙台）において、皆様に“地形研究No. 3”への投稿をお願いしたが、その直前、鈴木先生に投稿依頼についての相談をした。鈴木先生は、われわれに命じたことをすっかりお忘れになっていた様子であったが、さすが瞬時にことの次第を理解され、「よし、春の学会までには出せ。金は心配するな」とおっしゃった。しかしその夜の懇親会で、ある話を聞き愕然とした。どうも、鈴木先生は私たちと同年代の面々に、片っ端から同じ指令を出されていたらしいのだが、その指令を鵜呑みにしたのは、われわれだけだったのだ。他の諸兄は、この“タッタッタ、サッサッサ、パンパンパンのヒョイ”といういとも簡単そうに思える作業の前に、もっと難しい問題の存在することを見ぬいていたのだ（このことについては、匿名氏が詳しく述べてくれた）。われわれがその問題に気が付いたのは、年の明けた一月の中旬のことである。東大の鹿島氏から投稿の意志が伝えられてただけで、投稿を直接依頼した十数名の方々からも、1月31日〆切の原稿がただの一つも届かないのである。

締切日を翌日にむかえた1989年1月30日、JGU創立10周年記念大会実行委員会が京大防災研において行われたが、この会に、東京から鈴木先生と、同じく中央大の徳永先生とがみえられた。その夜、四条・阪急デパート内の飲み屋で、関東の赤炎と関西の赤炎とが、俺の方がよく燃えるとはばかりにボウボウと飛びかう下で、しゃぶしゃぶをつつついていたが、はたと“地形研究No. 3”のことを思い出し、「たったひとつの投稿予定があるだけで、あとは音沙汰なし」の旨を報告した。「我々が書くのは簡単だが、

それではおもしろくない。ひとつでもよい。ペラペラでもよい。重要なのは出すことだ。金は心配するな」というご指示を賜った。加えて、徳永先生からは、「〇君（徳永先生の弟子）が書くと言っていたぞ。」という朗報をも戴いた。しかし、このような景気のよい話も、炎の後ろに見える蜃気楼の様なもので、炎と共に新幹線に乗って東国に去ってしまったのである。まず、〇氏には、実験中ということで電話口にさえ出てもらえず（徳永先生はその時、いつものようにかなり酔っておられた）、さらに、唯一の投稿予定者であった鹿島氏からは「急に就職が決まり、その準備に忙しく、今回はキャンセルさせてほしい」とのとどめが打ち込まれた。

「こりゃだめだ。もうやめよう」と思っていたところ、われわれよりも先に“地形研究”復活の指令を受けたにもかかわらず、それを賢明にも無視した者のひとりである森林総合研究所の吉永氏からの原稿が届いた（鈴木先生の指令により、編集者がしつこくお願いしていた）。ひとつ届くと後も続くもので、編集者の二人と、2年前まで同じ実験室で机を並べていた筑波大の水野氏が、見るに見かねて投稿してくれた。さらに、これも見るに見かね、大阪教育大の石井先生が、有用な調査結果をご提出くださった。加えて、ありがたいことに、匿名氏からの原稿（編集者としてなんとなく全面的に納得してしまった内容であった）までもが届いた。ここに、なんとか“地形研究 No. 3”を出版することができた。これも責任感の強い吉永氏、編集者に対しいつも温かい友情を示してくれる水野氏、常に見守ってくださる石井先生、今度は実名で投稿して戴きたい匿名氏のおかげである。ありがとうございました。

地形研究 No. 4 以降は、原稿の集まり次第発行する予定であります。どんな内容でも結構ですから、どしどしご投稿お願い致します。なお、次号からは、基本的には、匿名による投稿は不可とさせていただきます。また、原稿は、フロッピーディスク（編集所では、5インチ2HD版一太郎を使用）で送って戴くと大変助かります。

地 形 研 究 No. 3

1989年4月1日発行

編集発行所 実験地形学研究会

〒543 大阪市天王寺区南河堀町4-88
大阪教育大学地理学教室内
(辻本英和 気付)